
短編保管庫

テスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編保管庫

【Nコード】

N6999V

【作者名】

テスト

【あらすじ】

ラブコメ、萌えの練習作品。キャラ崩壊注意？

一刀×愛紗

蜀州都、成都。そこにある城の一室で政務をする男がいる。椅子の背もたれに体重を預け、体をほぐすように伸びをする。

「ん〜！ 今日とは特別量が多いなー。もしかして詠が嫌がらせのもりでこっちに書簡を回してきてるのかな？」

眼の前の書簡の山という現実から逃げるように詠に恨み節を吐くその男、北郷一刀である。平々凡々なその見かけとは異なり、実態は蜀の王であり、天から降りた世界の救い手、天の御使いなどと呼ばれる人物である。

天の御使いと言われていても実際はただの一青年。いまでこそ世界を超えた非日常を生きているが、その能力は一般成人男性のそれと大差ない。その人物が一国の王になり、政務を為す。愚痴をこぼすには十分なストレスであると言えた。

「何を馬鹿なことを言っておられるのです。無駄口を叩いても書簡は減ったりしませんよ」

その愚痴を一刀両断するのは美髪公関羽。

いくら一刀が分不相応だ、力不足だ、と駄々をこねてももはや遅い。彼はすでに王となり責任のある立場。それを放棄し逃げ出すなど言語道断である。

とはいえ、愛紗も今日の書簡の量は尋常ではないことは知っていた。この量の書簡を今日中にまとめろ、など弱音を吐くのも無理は無いように思えた。そしてだからこそ、愛紗は一刀の執務室にいた。

「わかってるさ、ただの冗談だよ。……この書簡一つ一つが民のた

めになるんだからね。いくら量が多かったって負けてらんないよ」

そう言っつて一刀は政務に戻る。愛紗はそのときの顔がたまらなく好きだった。

一刀の普段は優しげな目を鋭く精悍にするその様は、勇敢な武人に通じるものがあると愛紗は感じていた。

「その意気です。非番の私が補佐するのですから、出来ませんでした、なんて許しませんよ」

愛紗はその胸に抱いた感情を表に出さぬように顔に力を入れる。緩んだ顔を見せることは乙女として恥じらいがあるからだ。

そのせいで怖い顔になってしまい、一人になって後悔するのは別の話である。

「はいはい、今日も今日とて北郷一刀は愛紗にいびられるのでしたとき、ってね」

「ご主人様！」

ははっ、と笑う一刀を見て愛紗は保護欲にも似た思いを抱く。

(まったく、ちょっと勇ましくて格好いいかと思ったら、今度は子どもみたいに無邪気な顔をして…………。)

様々な顔を見せる一刀を愛紗は愛おしく思うが、一刀の言葉に少々疑問を抱く。

(…………私はそんなふうに思われているのだろうか…………)

鈴々がよく言うアイシヤゴン、巷でよく聞く嫉妬神に代表される自身の二つ名。どれも好意的なものにはとても思えない。

一刀も先ほどの言葉から察するに、あまり自身のことをよく思っていないのであろうか。

思い返せば自身は他の者に強く当たりすぎていたかもしれない。

（だが仕方が無いのだ。私が諫めていなければ桃香様はすぐにぼわぼわとするし、鈴々は隙あらば仕事を放っぼいて遊びに行ってしまうんだ。私がしっかりしてないと……）

そういえば最近星によく言われることがある。何が眉間に皺が寄っているだ。貴様らが私をおちよくるからではないか。好きで皺を寄せてるわけではないわ。

星の不敵で挑発的な顔を思い出すと、ついムカムカとしてしまう愛紗。その眉間にはしっかりと皺が寄っている。

はあ、と小さくため息をつく愛紗。こういうところが二つ名の所以なのだたと納得してしまう。

（こんな私だ。ご主人様が私を……す、好きに思っていてられるなんてこと、ないだろうな……）

私は胸が張り裂けそうになるくらい好きなのに。

一刀の顔を見ていたときの幸福感はどこへ行ったのか、愛紗は落ち込んだ。

（ご主人様はずるいです……。私をこんなにしておいて自分は知らないふうにして……。私の女の部分は溢れ出してしまうというのに……）

一刀にこうした感情を持つ前までは、自分は武人として生き、女としては死んだものと思っていた。それが一刀と言葉を交わすたびにきつく閉じ込めた女の部分が少しずつ、自分が意識しない内に温められほぐれていってしまった。

『女』など武人には必要のない情弱な感情であると思っていたのに、今となつてはその女の部分が力をくれる。

ご主人様とまた会えるように。また話せるように。また触れられるように。

そう思うと偃月刀を持つ手に力が入る。万の軍勢に一人立ち向かえる勇気が持てる。

(…………そのはずなのに……。私はご主人様にどう思われているのか、聞く勇気もない…………)

愛紗はポーツと政務をする一刀を眺める。

自身を虜にする優しげにも勇ましくもなる澄んだ目、一本筋の通った鼻、笑うと白い歯がよく見える口。

愛紗は一刀の全てが愛おしかった。

(…………やはり私たちの世界と天界とでは顔の造形も違うのだな。こんな魅力的なら私など相手にされるわけもないか…………)

(…………でも)

一刀の顔を眺めるのをやめられない。

(…………やっぱり、ご主人様は格好良いなあ…………)

ポツと顔を赤らめる愛紗。胸を高鳴らすのを止めることなど出来るわけがなかった。

(ふふっ、ちょっと前までは字も書けなかったのに今はスラスラと政務をこなしてられる。あのときはご主人様もこの世界に来たばかりで初々しいものであったな。歳相応の緩んだお顔で、可愛らしかったことを覚えている。それがここまで成長して……)

(幼い顔も良いが、やっぱり今の凛々しいお顔が私は好きだな。そのお顔の澄んだ目に取り込まれてしまいそうだ。とてつもなく透明度の高い水のように私をはつきりと映し出していて、身も心も共にあるのだと思える。ああ、そうだ。今もこうしてご主人様の目に私
が……)

「えっ?」

一刀の目に愛紗が映り込んでいる、ということはずなわち一刀が愛紗を見ているということである。愛紗はポーツと一刀を眺めているのに気を取られ、一刀がこちらを見ていることに気付いていなかったのだった。

「どうしたんだ、愛紗?　じーっとこっちを見て」

一刀が問う。それも当然だ。愛紗は自身の表情を隠すために顔に力を入れていて、傍から見れば怒っているように見えた。その怒っているような愛紗に凝視される一刀が何事かと聞くのはまさしく正しかった。

「えっ!?!　何でもないですよ!!　何でも!」

「いや、何でもないならどうして睨むのよ?　俺ちゃんと政務やってるよ?」

「睨っ！？ 睨んでなんてませんよ！ ただっ！……」

「ただ？」

その先は答えられない。その勇気がない。ご主人様のお顔を見ているなど、そんなことを言ってしまったら羞恥で死んでしまいそうだ。

それきり黙ってしまう二人。空気は重く沈み込んでいた。

(うつうつ、こんなつもりではなかったのに……。ただお顔を見ていただけなのに……。ご主人様もひどいです。睨むだなんて……)

愛紗はどういう意図であろうと睨むような真似をしたこちらが悪いのだとわかっていたが、自身の思いに気付かぬ一刀に対しての恨みがあつて、素直に謝ることも出来ず黙り込んだ。

一刀は一刀でなぜ愛紗が怒っているのかも分からない。ただ質問しただけである。ただ理解したのは自分がなにか怒らせるようなことをしてしまったのであろうということである。

一刀は今日の自分の言動を思い返す。何か愛紗を怒らせるようなことをしてしまったのだろうかと原因を探すためだ。

そして、一つ心当たりを見つける。

「もしかして、『いびられる』って言ったのに怒ってる？」

見当はずれである。愛紗は肩を落とさずにはいられない。

一刀はその愛紗の様子に気付かぬまま話を続ける。

「俺は別に愛紗が怒りんぼとか言いたいわけじゃなくてね？ ただ

のちよつとした冗談というか……」

頭をかく一刀の話を遮って愛紗が言う。

「そうじゃありません。というより私は怒ってません」

「……とてもそう見えないんだけど」

「怒ってません」

また黙ってしまう二人。

「……どうやらご主人様は私がそばにしていると政務に集中できないよううで。私はもう自室に戻ります」

そう言っただけで扉に向かって歩き出す愛紗。一刀は愛紗の肩を掴んで歩みを止めようとする。

「ちよつと待ってよ。話は終わってないって」

「聞きたくありません」

「じゃあそこにいるだけでいいよ。愛紗と一緒にいたいんだ」

「……」

そう言われては愛紗も足を止めるしかない。

どうして私の心を震わせることを言うのだからか、この愛しむ主人様は。

(……いや、この人はそういう人なのだ。言葉巧みに弄ぶのだ。鬼畜だ。変態だ)

自身の期待を打ち消すように否定を繰り返す。その結果、自身の主を罵っているのだが意図しているわけではない。

若干顔を赤くした愛紗に気がつくわけもなく、一刀は足を止めてくれた愛紗にほっとする。

「さっきの話だけだね。ごめん、ちょっと訂正させて。愛紗はやっぱり怒りんぼだよ」

ピクンと愛紗の肩が脈打つ。それは、勝手にした期待が裏切られたと思つて。

一刀は愛紗の不安に思う感情は敏感に感じ取り、背中から包むようにして抱きしめる。

「でも、そこが愛紗の可愛いところだよ。ごめんね、俺は愛紗にかまってほしいから、ついついいじめちゃうんだよ」

耳元で甘美なことを言う。愛紗は裏切られたと思つたどん底の失望から天にも昇る心地を味わっていた。

「俺が情けなく弱音を吐いて、それを愛紗が『そんな事じゃ駄目です』って道を正してくれて。俺がふらふら女の人に目を奪われて、それを愛紗がジト目で見て……」

「そうやって俺を常に見てくれるのがすごい嬉しいんだよね。だから、確かめたくなっちゃうんだよ。今日も俺を見てくれるのかって」

（なんなのだ、この御方は！ 天の御使いだからって光輝く必要はないではないか！ 私の心を乱してなにが面白いのだ！）

いわれなきことを言われる一刀である。

「愛紗……？」

「ひっ！」

もはや幽霊に出会ったのかのような反応をする愛紗。その例の反応と少し違うのは頬が朱に染まっていることか。

その愛紗が不審そうに思い近づいた一刀の顔のアップを見せつけられて耐えられるわけがなかった。

「しっ、失礼しましたっ！！」

若干上ずった声で部屋をあとにするしか道は残ってはいなかった。

（これは戦略的撤退だ！ 断じて怖気付いたわけではない！ 断じてだ！）

一刀の執務室から猛ダツシユで自室へと駆け込む。

自室でようやく一人になれた愛紗はベッドに飛び込み、枕を顔に押し当てる。このようなニヤニヤと緩んだ顔を万が一にでも見られないようにだ。

（……大切な人、か……。と、ということ私は希望を持っていいんだろうか……。ご主人様も私のことを……）

「……ふふっ、ふふふふっ」

(……………笑いが抑えられんっ！)

胸の高鳴りを抑えることをすっかり放棄し、その高鳴りのまま体をジタバタさせる。この幸福を体全体で表現する。

「ふふははははっ！ 我が意を得たり！ 堅牢な城壁は崩れ、兵は流れ込んでいる！ あとは城主に槍を突きつけるだけ！ そう、槍を……………」

そうテンション青天井な愛紗が言ったところで詰まってしまう。槍を突きつける。すなわち気持ちを告げる。そのようなことを私が出来るとのこと。

あのと逃げ出してしまった私のような勇気を持てるのかと。愛紗は想像する。

目を焼くほどの後光に、一刀の神々しい御姿を。

「……………無理だっ！」

早々と諦める愛紗。その間0.1秒である。

「……………天は何故私に辛く当たるのか……………。槍を突きつける将が日和つてしまうとは……………。なんと情けないことか……………、だが」

「……………道は、拓けたな」

自身の気持ちは重々承知。一刀の気持ちも悪くはないとはつきりした。

これより先は一心不乱に突き進むだけ。

敵は後光などという奇々怪々な代物だけだ。奴を打ちのめしてし

まえば邪魔する輩はいない。

行動あるのみだ。

なるべく一刀のそばについて後光に慣れてしまおう。そのついで、と言っただけだが、一刀の好感度を上げる策を講じよう。

丁度日も落ちてきて、まさに今に相応しい策がある。料理を作ろう。男は胃袋を抑えてしまえばこっちのものであると紫苑も言っていた。経験豊富な紫苑が言うのだ、間違いはないはずだ。

目標が見えてからの愛紗の行動は早かった。

調理室に赴き、ろくにしたこともない料理を四苦八苦する愛紗は他の将から快いアドバイスを貰いながら、一つのチャーハンを完成させた。

メンマあり酒あり、一刀が好きだと言っていた魚の刺身あり、精が付くようにとすっぱんやヤモリも入れた特別料理である。当然味見などしていない。したくない。それは嫌悪感からではなく、全て一刀のものであるという意識からである。迷惑である。

そのチャーハンを落とさぬよう両手でしっかりと持って一刀の部屋へと向かう。その足取りは軽い。

遠くで異臭騒ぎなどでやかましいが、愛紗はまったく意に介していなかった。

意識は全て一刀に向かっていた。

美味しいと言ってくれるだろうか。

そう言われるのを想像して悶えるのを堪える愛紗。輝かしい未来に向かって夢ごこちである。

もちろんそれを食べた一刀は倒れた。米粒一つ残さずにしてから。

超合金Z！ 行け、ロボ華雄！（前書き）

本命の連載放置で何をやっているのか。一人称練習ということでは、ジェバンニが一晩でやってくれました。

超合金Z！ 行け、ロボ華雄！

記憶が定かではない。

私は確かに張飛に斬り棄てられたはずだ。陽光に照らされ燦然と輝く丈八蛇矛に一閃、袈裟斬りされ自身の知りたくもなかった血の味を確かめた。それだけはよく憶えている。忘れられるわけがないのだ。私を倒した人物の顔を目に焼き付けずに死するなど、武人として到底許容出来るものでないのだ。

そうだ。私はあるとき死んだはずだ。この身を虎牢関に埋めたはずなのだ。

ならば、なぜ私はこうして虎牢関の前で立っている？

なぜ私の体は鋼鉄となったのだ？

超合金Z！ 行け、ロボ華雄！

とりあえずこの体のままこの場に留まることは得策ではない。誰かに見られて尋問でもされたら面倒だ。どこか身を隠せる場所を見つけないければ……。

そう思っ、周りを見渡す。

先程から真つ暗闇なのは自身の目が狂ったわけではなく、今が夜中であるということであったようだ。厚い雲が月も星も隠してしまっ、手を伸ばした先も見えない。

くそ、これじゃ何も見えないな。なんとかならないものか……。

そう雲に向かって愚痴ると、私の体は自然に動いた。いや、果たしてそれは自然と喋っていいのか、むしろあまりにも不自然であった。私の意識とは別に動いたような気がするのだ。

くばあッ！！

口を限界まで開き、雲に向かってそれを放った。まるで電撃のようない筋の閃光。辺りはまるで昼にでもなったかのように煌々と照らされ、その閃光は一直線に雲を貫き散り散りにさせてしまった。

「……はあああああああつ！！？」

いやいやいやいや、おかしいおかしいぞ。

たしかに私は「雲が邪魔だなあ」とは思ったが、こんな人外な手段をもって光を求めたわけではないぞ。

自身に起きた超常現象に混乱の極みだった私だが、今のこの状況が最悪なのは分かった。

虎牢関から、今の光は何だと騒然としている様子がかかる。いや、この距離から会話が聞き取れるのもおかしいのだが。

だが幸いなのは先の閃光によって遠くに森があることが分かった。今はもう月も出ているので道を誤ることもないだろう。

私はとりあえず閃光に感謝しつつ、森へと走った。そのときは気付いていなかった。

私の目、”暗視モード”にできたのだなあ。

森をひた走り、ひらけた泉まで来て私は腰を落とした。

息を落ち着ける必要もなく体は絶好調といったところで休む必要

「な〜にが治療だ！ 魔改造もいいとこだ、これは！ 絶対に許さ
んぞ、絶対にだ！ 狂気の発明家！？ える・ぷさい・こんがりい
！？ まるで厨二病全開じゃないか！」

私は助けてほしいなどと言ったことはないぞ！

武人としての死を無碍にしおつて！ 到底容認できぬ！ この発
明家とやらと馬好きの武將め！

「発明家も！ 馬好きも！ 私が叩つ斬る！」

華雄いれいざーがんで周囲を焼き野原にして、咆哮する。咆哮せ
ずにはいられないのだ。武人として誇りある死が私の望みだったの
だ。それに違わぬ舞台を用意してくれた張飛すら馬鹿にされている
ような、まるで死命のような義務感が生まれていた。

「これが開戦の狼煙だ！」

天に向かって華雄いれいざーがんで立ち昇らせる。

上れ昇れ、私の怒り。震える心の臓が燃え尽きるほどの熱を示す
私の華雄いれいざーがんで。

私はここに第二の産声をあげたのだ。

そんなことをやっているから、また虎牢関の兵から逃げる羽目に
なつた。

私の安息の地はどこだ！

はあ……。

森を抜けてから、もう何日荒野を彷徨っただろうか。いや、この私の高性能電子頭脳が計算すれば十三日と二十一時間五十六分とすぐに分かるのだが、この鬱々とした感情がそれをさせなかった。

どうせ睡眠も疲労もないのだ。寿命もないらしい。のんびり行こう。

寿命もないといったが、実際は少し違う。

私は私の心の臓の代わりである核融合炉なるものを利用して動いているらしい。それが動き続ける限り、死ぬことはないそうだがどうでもいいことだ。私は憎き敵を討ったあとは大人しく死ぬつもりだからだ。

まあ、それまでは生きていなければならぬので肅々と核融合炉を動かすため、用意された食事を食う。その食事も本当は必要ないらしいが、暇つぶしのためにも食っている。力も付くらしいしな。

ガリガリ。ギシギシ。ガジガジ。

そんな音を立てて食事する者は私くらいなものだろう。もしかしたら別の世界線では緑の服を着た男もしているかもしれない。

この世界では私だけ、とそんな無駄な謙遜をして食べる。味などない。味付けするつもりもない。こんなものは人間が食べるものではないのだから、味付けしても無駄な努力というものだ。

こんな 鉄クズなんて。

いや、鉄クズといったがなかなか種類豊富だ。まったく余計な気遣いだ。

鉄に金、銀、銅、炭に白金……。ただの石ころや粘土まである。

ぜーんぶ同じ味だ。用意した奴は馬鹿だ。

というか私に味覚はあるのだろうか……。

はあ……。

溜息をつくと薄っすら口から華雄いれいざーがんで出てくる。薄っすらなので何の威力もないがなんとなく嫌なものだ。それを見る度自身が人をやめてしまったことを見せつけられる。

そんなことを考えていると目の先に人が見えた。

ようやく人と話せる。幸い見た目は首から下の上半身を除いて変わっていないかったので外套を使えば機械の体とバレることはないだろう。……上半身だけならなぜ高性能電子頭脳を……。なにかしら事情があつたのだろうか……。しくしく。

「おい、そのの！」

さめざめと泣いているとさきに見つけた人が話しかけてきた。格好から察するにただの農民といったところか。少々様子が違うのは大荷物を持っていることだ。

「こっちは賊がいてあぶねーど！ 引き返したほうがええど！」

「賊だと？ そんな輩私が叩き斬ってくれるわ！ どこにいる、その馬鹿は」

やけである。

この体になって敵などいなくなったことは分かっていた。呂奉先ですら脅威に感じない。

もう何も恐くない。

「一人じゃ無理だっぺ！ 奴ら二百はいるで！ 勝てっこねえっぺ！」

くばあッ！！

「勝ったな」

「ああ」

私は今、成都に向かっている。

賊共を倒す報酬として情報をもらった。食料も金も別に必要でなかった。情報が最も大事なものだ。そうはいつでも無理やり押し付けられたが……。いらんと言っておるうに。

なぜ成都なのかというと、そこに張飛がいるからだ。

張飛ともう一度決闘を、という事ではない。張飛以外知り合いがいなかったのだ。

董卓様たちの行方もしれず、発明家も馬好きの行方も分からず、途方に暮れる私は誰かに頼らなければいつまでたっても敵を見つめることはできないと悟った。

この大陸の情報を収集できる有力者。そう考えて思い浮かんだのが張飛だ。

自身の交友関係の狭さが憎い。なにが楽しくて自身を斬った相手に泣きつくというのだ。自然と涙が出るわ。その何が悪い。ちくしょう。

そうして成都に着いたのだが、街人から聞くに張飛はいないらしい。それどころか劉備も関羽も、主要な人物は出払っているとのこ

と。

なんでも大きな戦があるらしく赤壁に向かっているとか。

魏に対抗するため蜀呉同盟となって戦うらしい。そのこと自体は驚くことはなかった。魏は強い。あの張遼は曹操と共に居るといふ話だ。董卓様から曹操に主を変えるなど余程曹操に感じるものがあったということだ。その曹操に相對するには同盟もやむを得ないといつたところだろう。

こうなつてしまつては魏はお終いだらう。なぜなら私を破つた孫策と張飛の二人がいるのだ。負けるわけもない。

……しかし、それでは張遼が死んでしまふのではなからうか？

あまり好ましいことではない。仮にも同じ軍に所屬して同じ釜の飯を食つた仲だ。出来ることなら生きてもう一度会いたい。

それに張遼は神速と言われた騎馬の名手だ。奴なら私をおせつかいにも助けた馬好きとやらを知つていてもくれん。

やはり是が非でも生きてもらわねばならない。

別にこうして一人になつて張遼の馴れ馴れしい態度が恋しくなつたなどということはない。？水関や虎牢関で私を諫めていたことが私に生きて欲しいという張遼の不器用な表現手法であつたのだろうなどと思つたわけでは決して無い。それに今更ながら気付いて張遼に邪な感情を抱いたわけでは断じてないのだ。絶対にだ。

やつてきました新野城。籠城の構えを見せる曹魏に蜀呉が攻め立てる。

これでは陥落は時間の問題かと思ひ、華雄いれいざーがんと蜀呉に放つてやろうかとくぱあしたところで、私の”鷹の目”が発動した。

遠方の荒野に見える土煙。私はそれを凝視する。

「戦闘兵数六万……十万……、バカな！ まだ上がるだと!？」

次々に更新される数字。最初に計測してから二分三十八秒経過したところで結果が出た。

兵数三千万。うん、三千万。さんぜんまん。

五胡が総力をあげて攻めてきたのだ。

この途方も無い数。魏呉蜀全ての兵数を足しても八十万に届かないといったところで、それが驚異的であることが分かるだろう。

このままでは五胡に蹂躪されることは確実であろう。

孫策も張飛も、そして張遼も。

ただ殺されるのだあれば、まだ救いというものだ。だが彼女らは私とは違って見目麗しい魅力的な女性なのだ。その彼女らが死などというもので済むはずがない。……ハアハア。

「……私はこのときのために今まで生きてきたのかもしれない……」

そう思ってしまったえばこの体にした敵もそれでも悪い者でもないのだと感ずる。

私には三千万を打ち倒す力を、愛する者を守る力をくれたのだから。

だが心残りなのは最期に張遼に会えなかったことか。それでも。

「彼女を傷つけることは！ 有象無象の区別なく！ 私の金剛爆斧は許しはしない！」

発明家から渡された最期の食料。金のかけらを口に含みゆっくり

嚙下した。

「完成！ 『金剛爆斧 らいとせーばー えでいしょん』！」

我が右腕を光り輝く巨大な戦斧と変え、三千万の兵に一人特攻する。

誰も来るんじゃない。これから先は化物の一方的な虐殺。人の入ってきていい領域ではない。

誰も、誰も私を見るんじゃない。

血の河に一人立つ。

くそ、無理をしすぎた。もとより覚悟の上だったとはいえ二度目の死というものは辛いものだ。

”えねるぎー”がもう無い。核融合炉の鼓動が小さくなっている。食料も尽きこのまま終わりを待つ。

……まあいい。五胡は殲滅させたんだ。武人として文句のつけようがない大戦だった。それ以上に守りたい人を守れた。これ以上の幸せはない。

もう目が見えない。

張遼め、私がこうして戦ったのにねぎらいにも来ないのか。薄情な奴だ。奴の血の色は何色だ。私は茶色の油だ。あ、血すら通ってなかった。

もういい。寝てしまおう。この私が黄泉路に逝けるか分からないが、そこで張遼を待つのも悪くない。そのときに言うんだ。恥ずかしくても、勇気を出して。

「わ、私は、お前のことが」

おわり。

元ネタ

ベルセルクとかEAT-MANとかまどかとかシュタインズゲートとかエヴァとか
マギカとかヘルシング

超合金Z！ 行け、ロボ華雄！（後書き）

復讐っぽいノリどこ行ったんだよ！（CV・ちゃんみお）

リア充、暴発しろ（前書き）

クリスマスのため、と思っていたのに気付けばリア充憎しでクリスマスから離れていった
とりあえず爆発しろ

もどがエロゲですし、この程度のエロは問題ないだろ……うん、たぶん。

リア充、暴発しろ

魏の勝利にて乱世の終わりを告げてから幾数日経った日のことである。

勝利の熱に浮かせられたような興奮を一刀へ思い思いにぶつけて、またその情事が日常化したときのこと、一刀は今日もまた布団に女体とともに眠っていた。

柔肌の体をすりすりときさすりながら健やかに眠る一刀。それを憎々しげに思ったのか、陽光がカーテン越しに一刀の目を差す。

ううん、と光を嫌うように寝返りをうつ。それは腕枕状態では必然的に女体を抱きかかえるような体勢になり。太陽は徐々に高くなり心なしに赤くなっている。それは憤慨する非モテの気持ちを代弁しているかのようにであった。

一刀はというとそんな太陽の気を知ってか知らずか、僅かに覚醒した脳を働かせながら抱いたそれを愛でる。

背を向いた女性の頭のとっぺんから髪を梳くように撫で、その先の耳をくすぐる。顎のラインに手を沿わし指は潤いを帯びた唇をつんつんと叩く。

「……………うん……………もういやあ。ふふ」

その本気でない否定の声は鼓膜を震わし、まるで脳が溶けるかのような多幸福感を味わわせる。

しかしその声は一刀に一つの疑問を抱かせた。

(この声は誰のものだろう。)

寝起きということも、また情事の後の妙な倦怠感もあり、目も開くのも億劫な一刀は靄のかかった頭で考えた。が、やめた。

誰なのかというよりも今はこの柔肌に溺れていたかった。それに体を触っていれば誰なのか分かるというものだ。この世界に降りてきて数多の女性を抱いてきたとはいえ、さすがに惚れた女の体のこととを把握していないということはない。

(確か今日抱いたのは凧と真桜と沙和だったな)

身長之差はそれほど無い。髪の毛の長さとはいうと凧と沙和が長いので短ければ真桜、ということになるのだが、先程撫ぜたときは長さを意識していなかったので結局わからない。また髪に手を伸ばせば分かることだが、それでは芸がない。一度触ったところは触りたくなかった。

これは挑戦だ。

なるべく三人の違いのない部分を触って正体を暴いてやろうと一刀は思った。であるならば圧倒戦力差のある胸を触ることは出来ない。それにはさすがに名残り惜しかったが断腸の思いで諦め、行動に移した。

顎からそのまま手を落とし鎖骨へ、指先が僅かに触れる程度の距離で行ったり来たり。時折円を描いて肩から脇へと移行する。ふにふにとつまむようにして肉感を楽しむ。

つーっと滑るようにして脇腹へ。近くの乳の熱を手の甲に感じ、一刀は思わず感嘆の溜息をついた。その吐息に女性の髪は揺れ、むずがりながら振り返り一刀の額にキスした。

「ふふっ、もうだめよ。……華琳に怒られちゃうわよ?……」

その言葉に一刀は時が止まったかのように体を凍らした。今まで肉の熱でしっとり温められていたというのが嘘のように、すーっと血の気が失せていった。

この言葉の色、肉体の質感、醸し出す妖艶な雰囲気、三羽鳥のい

「ええ、そうね。私が来たときは彼女らと励んでいたわね。今は床で寝てるわよ、毛布くらいかけてあげたら？」

一刀は首を伸ばし、ベッドの脇で仲良く川の字で寝ている三羽鳥を見つける。当然、一刀と致した後であるので素っ裸のカピカピである。三人は熱を求めるように互いに重なりあって、真ん中にいる凧は寝苦しそうに唸っていた。

このままでは風邪でも引きかねない。

そんなふうになると、一刀は自身の毛布をかけようと行動する。その毛布の中に雪蓮がいることも忘れて、だ。

舞い上げられる毛布。そのはためく毛布に見え隠れする雪蓮の魅惑的な肢体。春蘭にも似たプロポーションは健康的な印象だけでなく大人の女性のもつ”余裕”の魅力を発していた。

そしてなによりも目を惹きつけたものはその表情である。自身の肉体から放たれる効力を重々承知し、それを武器にすることに何のためらいもなく。その小悪魔的で自信満々の顔を見ていれば、どうしようもなく霸王さまの顔を想起させた。

そんな一枚の絵画を思わせる裸体を見て一刀が何も思わぬはずもない。だから呆けたように口につくのも無理もないというものだ。

「……綺麗だ」

その真っ直ぐな賛辞の言葉は雪蓮の予想の範疇外であり、思わず目を丸くしたのと同時に、

「ぶっ、あはははっ！　なにその反応！　あなたって本当にタラシなのね！」

盛大に笑った。顔を赤くする一刀を放置し、足をじたばたと動かし癖るんと右往左往する乳も気にせず腹を抱えて笑った。

期待した一刀の慌て姿ではなかったがそれ以上の戦果と言えた。
この天の御遣いはなんと面白い。

対して一刀。

純粹な気持ちをして口にして笑われるのは心外である。魏の種馬と言われ既に大陸に（汚）名を馳せる者として『タラシ』と言われるのは致し方無しとしても、その言葉がタラシのための言葉として受け取られるのは一刀の思うところではない。

凧たちを起こしてはならない、という名目のもとに一刀は行動する。

「静かにしないと起きちゃう、よっと！」

「あはははっ……はうん！ ちょ、ちょっと一刀！ ん、ちゅ、んああうう……んっ」

寝る子を起こす悪い口にはおしおきを。

雪蓮を押し倒し、自らの口で封じ、考える間を与えぬよう些か乱暴に口内を舐め回す。

突然のことに否定や拒絶の言葉を繰り返す雪蓮であったが、無理矢理にもたらされる快楽に少しずつのめり込み、言葉を出すより舌を動かすことにつとめる。

互いに高めあう快感が酸素に優先し、荒い息遣いと茹だったかのような頭が終りが近いことを告げていた。

そして先に音をあげたのは雪蓮だった。

一刀の背を抱くようにしていた手を拳に変え、コツリと叩く。

「んはあっ、はあっ、ふっ、あなたってば、んくっ、やるじゃない……」

「これでも魏の種馬って言われてるからね。閨の上では男の誇りにかけて負けないよ」

種馬の面目躍如。ベッドが本当の戦場の男に負けは許されず、そうさせるだけの力があつた。

優しげな笑みに見下ろす男に、とろんとした目の女。

馬乗りのその状態が今の男女の関係を示してようだった。

「それで、落ち着いたかな？」

「下の疼き以外はね。まったく、これでも私は性欲旺盛なほうと自負してるのよ？ このままお預けなんて許さないからね」

へその下部を手で抑えながら舌を出し意地悪く言う。

その雪蓮の可愛い仕草には苦笑を返すほかない。

「自分で言うかなあそれ……。でももう時間無いでしょ？ ほら、もう太陽が昇ってるよ」

「ぶうぶうー。まあそうだけどさく。私だっておチビちゃんに斬られたくないしねー」

「っていつかなんでここにいるんだ？ 俺がこの部屋に入ったときは確かに俺と尻たちの四人だったぞ」

「あなたに興味あつたから忍び込んで入ったつ。許してねー」

てへぺろと悪びれることなく謝られては、もう何を言っているのやら。

一刀は仕方ないと頭をかき、昨夜のことを思い返す。

連日の交わりにさすがに疲れを感じてもなお、女の子の期待を裏切れず、また女の子の魅力に辛抱たまらず布団に腰を下ろしたのだつた。

舌だけを使わせて犬のように一物を舐め回す尻に一発、真桜にはその豊富な乳を使わせて一発、沙和は髪を巻きつけて一発。そして、最後に三人を並べて……。

「ん？ んん？ 三、人？」

首を捻り、雪蓮の顔を伺う。

先程のてへぺろ顔だ。顔からは読み取れない。ならば。

髪の毛は……異状なし。下へ移行する。

胸は……コレも異常なし。下へ移行する。したくない気持ちを抑えて。

ゆっくり、ゆっくりと目を移す。そこから逸らすようにくびれのある脇腹へ、肉感たっぷりの腰を経て太ももへ。ここからさらに緩やかに視線移動。

それが仇となったのだろう。といっても遅いか早いかの差だが。

なにか白濁したものが垂れているのが見えた。

雪蓮の顔を見る。てへぺろが恐ろしく見えた。

顔と股を交互に見比べていると何故か笑いが込み上げてくる。それは現実逃避と呼ばれるものだろう。

もはや凝視といつていいほど股に近寄るとよく分かる。その白濁液は紛れも無く秘部から流れ出ていた。

そう理解してしばらく固まった一刀は一つ深呼吸して、

「なんだ夢か……」

全力で現実逃避であった。大量の汗と足の震えは現実に巻き戻そうとする悪魔の仕業としか思えなかった。しかし、実際現実に回帰させたのは雪蓮であり、その言葉は死刑宣告に等しい。

「私、今日危険日なの……。責任とってね……。あなた……」

その『あなた』が今までと違う意味に思えたのは気のせいではないだろう。

ぐにゃあ〜と目の前が歪む。自分がどこに立っているのかと思えるほどの嫌な浮遊感を味わう。この絶体絶命危機的状況緊急アラートこれは訓練ではないが頭の中でけたたましく鳴り響く。

その状況の中で頭の片隅に冷静な自分が微粒子サイズで生き残っていたのは、これまでの経験のおかげである。異世界に来て戦争をして国の中枢で責任をもち、心を鍛えてきた結果であった。

あの経験は今この時のために。

「雪蓮、もし子どもができたら結婚しよう」

そう言うしかほかないだろう。

魏の人間として、魏の仲間との子が生まれるのであればコレほど悩まない。むしろうれしいほどだ。ただ今回は呉の人間。それも王様だ。責任逃れなど出来るわけがない。

一刀はこのような事態になった自身の不徳を情けなく思うとともに、華琳たちのことを考え申し訳なく思った。

涙を抑えるために天を仰ぎ目を閉じる。

（華琳はどう思うかな……。桂花とか春蘭とかだったらゴミを見るような目で蔑んでくるって想像できるんだけど……。なんだか一番好きな人のことが出てこないなんてホント馬鹿みたいだ。……。風たちには悪いことしたな。彼女らは優しいからこんなことになったら気に病むかもしれないな……）

そう思い、丁度この部屋にいるのだからと顔を見ておこうと考える。

毛布に丸まって健やかな寝顔を見せてくれるようと、期待するのもおこがましい身ながら振り返る。

しかし、見せてくれた顔は想像したものは全く違った。そこにあつたのはニヤニヤと笑みを浮かべる沙和と真桜、居心地悪そうに頭を下げる凧。なにより目を惹くのは『ドッキリ大成功!』の派手なフリップであつた。どこに隠してあつた。

「えあ?」

「ぶっ、あははははっ!」

一刀の奇天烈な獣を思わせる声に端を発し、笑いが雪蓮、凧たちから溢れる。

そんな状況になつてもまだこの急展開についていけない。キヨロキヨロと落ち着きなく意味もなく見渡してしまう。

「え? ええ? どういうこと? え? なんだこれ?」

そう問うても答えられるものはない。皆笑い転げて会話するほどの理性は無い。唯一、会話のできそうな凧に近寄って聞く。

「お、おお凧凧! どこからドッキリ!? ヤツてないよな!? ヤツてないと言つてよバーニイイイ!」

「隊長……。かなり本気に聞いてますね……。昨夜一緒にね、閨をともにしたというのに少し悲しいのですが……」

「ゴメン! マジで悪いと思うけど今は頼むよ、凧えもん! ネタバラシはよ!」

凧の肩に手を置き、すがるように膝立ちする。その格好がまた笑いを誘うのか周りかどんどんうるさくなるが、そんなことより真相だ。結婚を申し込んだときのあの勇姿は何処へかに行ってしまった。人間、降って湧いた救済には必死こいて飛びついてしまうものだ。そんな涙目の一刀に若干の萌えを感じ頬を赤らめる凧が答える。

その背に忍び寄る魔王の影。いや真桜の影。

「だ、大丈夫です。隊長は雪蓮さまとは「避妊」してません」

「オオウウウウオマイガッツツ！ どこが大丈夫なの！ 完全にアウトだよ！」

「あははははっ！ ふひっ、ひーひー、くるしいくるしいよー！ た、隊長！ 面白すぎなのー！」

凧には一刀が何を言っているのか分からなかったが、見た目から憤死間近なのが分かった。

「落ち着いてください隊長！ 大丈夫ですから！ なんにもしてません！ 雪蓮さまが計画した悪ふざけですから！」

「嘘だ！」

「なんですかその即答速攻大否定は！？ ホントですから！ 信じてください！」

そんなわたたと大騒ぎをすれば当然他の部屋にも響く。そしてそのとき、いとおかしなことはこの部屋にいる者は全裸ということだ。

はてさてこの部屋に一番乗りするものは誰か。得てしてこういうとき、最も来て欲しくない者が来るものだ。

「一刀はなにこんな朝っぱらから騒いでいるのかしら？」

「ちよつと華琳、さつきから騒がしいけど何事？ ……って姉様の声ね……」

それも二人も。

このあと扉を開けた二人の髪が天を衝いたことは言うまでもない。

リア充、暴発してなかった

「……………やったか？」

「ええ冥琳。天翔ける龍の血脈、この身に宿し我帰還すつてね。これも呉の繁栄のため……………。ふふっ、おチビちゃんたら、呉に一刀によく似た子が生まれたらどんな顔するかしら？今から楽しみだわ」

「雪蓮が言つと繁栄より嫌がらせに重きを置いてるみたいだな……………。まあいい。たとえ天の御遣いが魏にいようと、民の声を無視することはできない。いずれ呉の子が天の御遣いに似ていることに気付く者が出てくる。いや、出てこさせる。魏にはまだ子をなしている者がいないという話しだしな。……………精々利用させてもらおうか……………」

「ふふふっ……………」

「くくくっ……………」

リア充、やっぱり暴発してた？

了

リア充、暴発しろ（後書き）

最初はリア充である一刀を不憫な感じにしようと思ってたんだが、なんかそれじゃあ一刀らしくなくてどんだん軌道修正を迫られた。わけわからないまま中出し 次第に大きくなっていく腹 びくびくする一刀

みたいなことをしたかったんだが一刀さんだったら華琳に殺されてもいいから認知するだろうなーと思いつき、こんな感じに。オチに持っていくの大変だったわさ

モチベアップのため書いてたんだが、途中で保存せず終了して発狂しかけた。心臓バクバク言うのな。

ただようやくカンが取り戻せてきたような気がする。毎日1000字くらいしか書けなかったのが、二千字くらいならイケルで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6999v/>

短編保管庫

2011年12月24日13時56分発行